

# ふるさと講座



ジオパーク 成り立ち編 ②  
最終氷期の生き残り

シロウマ  
アサツキ

今

回は前号の続きです。今から約2万年前になる最終氷期では、日本列島の平均気温が現代より9℃程度低かったといわれており、山陰地方の本土側に分布していた動植物にとって、生きていくのにとっても過酷な気候であったと考えられています。気温の低下に適應できなくなった動植物たちは、生き残りを賭けて、より温暖な気候の場所に逃避を試みたのです。その逃避地の一つが隠岐諸島だと言われています。本土と陸続きであった隠岐諸島は半島の突端部に位置し、海の影響を強く受けていたため本土に比べると気温も高く、本土よりは比較的温暖なこの島へ逃避してきたのです。やがて、約1万年前になると地球の気温の上昇とともに隠岐諸島は離島となります（※前号参照）。最終氷期の本土と陸続きだった時に逃避してきた植物の中には、そのまま島に閉じ込められてしまい現在まで生き残っているものがあります。この氷期の生き残り植物を、隠岐ユネスコ世界ジオパークの学習で、「北方系植物」「高山性植物」と呼んでいます。なぜなら、現在のこれらの植物の日本列島の分布域が、東北地方や北海道などの北国や標高約700m以上の山地だからです。最終氷期が終結し、やがて温暖な時代がやってくると、冷涼な気候で生まれた植物たちは、今度はより涼しい居場所を求めて現在の生育地へ移動していったのです。あるものは高い山に逃げ高山植物と呼ばれるようになり、あるものは多雪地帯の北国へ逃げて行き、北国の植物となりました。隠岐諸島のように高い山がなく冷涼な場所が存在しない島の場合、

一般的には寒地系の植物が生育し続けるのは不可能であると考えられていますが、ここでは自然界の例外として、氷期の遺存種と考えられる植物が生育しているのです。例えば海士町の海岸では、高山性植物であるネギの仲間の「シロウマアサツキ」が見られ、海岸に高山植物が生えるという、常識では考えられない植生となっています。海士町ではこのシロウマアサツキが北分と知々井岬で確認されており、そのいずれもが海岸の岩場です。初夏にかけて薄紫色の美しい花を集団で咲かすので、海岸のお花畑といった感じです。足場があまり良くない場所なので簡単に見に行くことができないのが残念なところですが、「シロウマアサツキ」と聞くと「そんなの知らない」といわれる方も多いかと思いますが、「分葱(わけぎ)」ならどなたもご存知ですよね。この植物は、「分葱」の親戚なのです。名前の由来は、「白馬岳で見つけたアサツキ」であることだといわれています。ここで特筆すべきことは、白馬岳に生育しているということです。白馬岳は標高2,000mを超える高山です。そのような場所に生育するものが、隠岐諸島では海岸の波打ち際で見られるのです。ものすごい環境の差です。隠岐のジオパークでは、この現象を「隠岐の植物分布の低地化」と呼んでおり、隠岐の独自の生態系を表す一つの事例となっています。

〔海士町文化財保護審議委員  
深谷 治〕

